

## 山木 壮 氏 学位審査結果の要旨

主査：螺良 愛郎

副査：野村 昌作、岡崎 和一

PD-L1 は腫瘍細胞上に発現するリガンドで、T 細胞上の PD-1 レセプターと結合し、T 細胞の細胞傷害活性を低下させる。膀胱癌における PD-L1 の発現を、従来の免疫染色に比べ高感度である phosphor-integrated dot (PID) を使用した免疫染色を用いて、従来の免疫染色と比較し、PD-L1 の発現と臨床・病理的因子との比較検討を行なった。その結果、DAB 染色による発現率(14.3%, 6/42)に比べ、PID 染色による PD-L1 発現率は 61.9% (26/42) と、高感度であり、PID 染色による PD-L1 陽性/陰性群で全生存期間を比較すると、陽性群で有意に予後不良であり、多変量解析においても独立した予後不良因子であった。なお、CD8<sup>+</sup>TIL 陽性症例では、PD-L1 発現陽性はより強い予後不良因子であった。よって、CD8<sup>+</sup>TIL 陽性症例では、TIL による細胞傷害活性が PD-1/PD-L1 による免疫逃避機構により阻害されていることを示唆し、免疫 check-point 阻害剤は、TIL による抗腫瘍細胞効果を増強できる可能性があり、本研究は十分学位に値すると判断された。